

# PA C分析を語る（1） 質的分析と量的分析の結合について

企画者・司会者：伊藤武彦（和光大学）

話題提供者：内藤哲雄（信州大学）

井上孝代（明治学院大学）

伊藤武彦（和光大学）

指定討論者：やまだようこ（京都大学）

南風原朝和（東京大学）

日本教育心理学会第50回総会 自主シンポジウム

2008年10月14日 東京学芸大学

# 【企画趣旨】

“量的と質的の間には深く暗い川がある  
誰も渡れぬ川なれど  
エンヤコラ今夜も舟を出す”

PAC分析は内藤哲雄（信州大学）が開発した質的分析と量的分析を結合した方法である。

- PAC分析を用いた研究や実践は、現在では、心理学分野だけでなく医療・看護・福祉分野、異文化間教育学分野、日本語教育分野、社会学分野、マーケティング分野など多岐にわたっている。技法を詳述した入門書『PAC分析実施法入門：「個」を科学する新技法への招待』の発行は、初版に加えて改訂版は三刷りとなっている。卒業論文や修士論文での利用も多く、博士論文での一部利用も増加している。2006年3月にはPAC分析学会が設立された。
- 研究方法論の観点からPAC分析についての様々な語りをつきあわせるのが本自主シンポジウムの目的である。
- 今回のシンポジウムは、創始者の内藤哲雄氏、PAC分析をカウンセリングと臨床心理学の研究に拡張した井上孝代氏、PAC分析のMDS表現への拡張を考えている伊藤武彦の3人に、PAC分析について語ってもらう。次に、質的研究の観点からやまだようこ氏より、量的研究の観点から南風原朝和氏よりコメントをいただき、討論と対話を深めたい。

# CiniiによるPAC分析の論文のタイトルの分析による研究動向調査

- 分析対象: 1993年から2007年までの15年間のPAC分析の研究動向について明らかにするために、データベースCiniiより「PAC分析」(83件)と「態度構造」(92件)をキーワードにして検索し、PAC分析を用いていない論文を除外した、1993年から2007年までの105件の論文を分析対象とした。なお、Ciniiに収録されていない論文については今回補足することとはせず、あくまでもCiniiによるデータに限り使用した。
- 分析ツール: テキストマイニングの道具として数理システムのText Mining Studio (Ver3.0.1)を用いた。
- 手続き: 上記の方法により、分析対象105件をText Mining Studioに取り込み、論文タイトルをテキストと見なして、分かち書きの前処理を行った。若干の同義語を統合し、また複合語を二つ以上の単語に切り離す作業を加えた後、以下の分析を行った。

表1

項目	値
論文総数	105
一論文あたり平均タイトル文字数	23.4
タイトルとサブタイトル合計	163
平均文長(サブタイトルを含む)	15.1
使われた述べて単語総数	681
異なり単語の総数	362

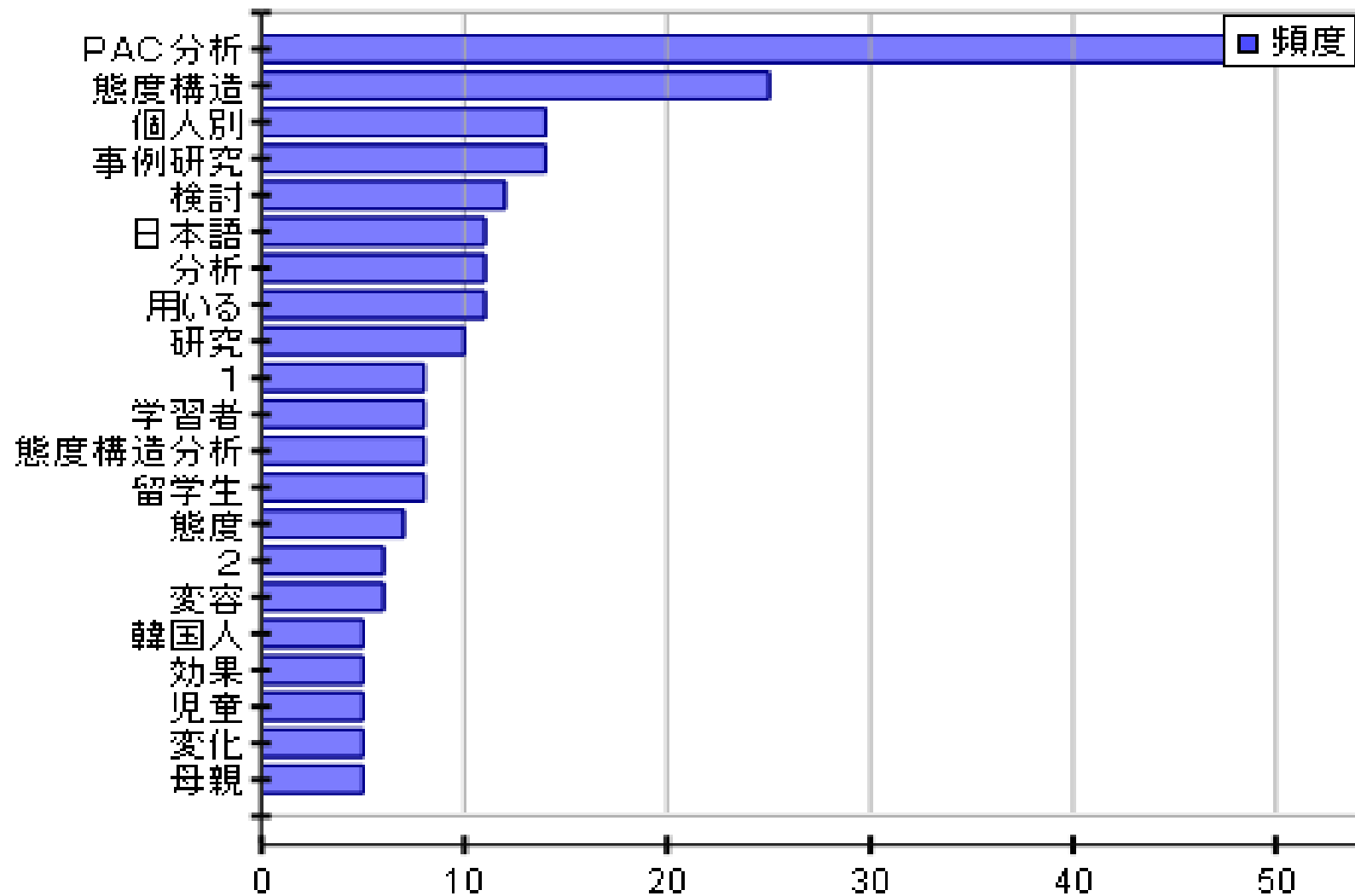


図1 使用頻度数の多い単語 (上位20語)

